

《教育長メッセージ 第12号》

『授業』

学校で子どもたちが過ごす時間のほとんどが、授業時間です。

小学校では45分、中学校では50分を1単位時間とし、学年によって違いますが、年間で約1000時間の授業が行われます。



年間の授業時数や学習する内容は、学習指導要領で定められています。これは、ナショナルスタンダードとして、日本中どこに生まれ育っても、日本人として同じような教育を受けられるということです。もちろん、その地域やその学校の特色を生かした、裁量が認められています。

授業は、教員がプロとして、計画を立てて行うものです。1単位時間の計画は「学習指導案」というもので、その時間の目標や学習課題、子どもへの投げかけの言葉、子どもの反応の予想、指導するうえで注意することなどが、細かく書かれています。

「教師は授業で勝負する」というフレーズが教育界では誰もが認めるところで、そのために、教員は研修や研究をしなければならないと、法律に定められているのです。

さて、それでは、どんな授業がよい授業なのでしょう。

授業は、教員と子どもたちが行うものですが、授業の主体は、子どもたちです。その視点から見ると、子どもたちが意欲的に、真剣に、課題解決に取り組んでいるかがカギとなります。

私が、教員になった頃は、教員が主導で一方向的に子どもたちに知識を伝達し、わかりやすく、時には、強制的に教え込むことができることが、教員の力量とされていました。

しかし、今では、子どもたちが自ら課題を解決し、知識を習得する活動を計画的に仕組み、その活動を支えることができるかが、求められる教員の力量とされています。

このことは、子どもたちがこれから生きる社会が、どのような社会で、子どもたちが将来、しあわせに生活するためには、どんな能力を求められるかという根本的な命題から導き出されているのです。

授業は、そのための（しあわせに生活するための）能力を育てる場なのです。

私は、学校の、授業の1単位時間が「生きる力」を培う場であると考え

ています。そして、その積み重ねは、その子どもの将来を左右することもあると思っています。

私は望んでいます。今この時も市内の学校で行われている授業が、よりよい授業であることを。

だから、私の大きな使命は、授業を支えること、子どもの学習権を守ることなのだと、常々、自分に言い聞かせているのです。

次回は、『登山』について、話をしてみたいと思います。